

銅×芸術

COPPER ART

カバーワールド

Copper World

銅版画の世界



池田俊彦さんの作品。
タイトル：
The melting self portrait
サイズ：
イメージサイズ
500 × 325mm
シートサイズ
789 × 545mm
技法：etching drypoint
制作年：2023



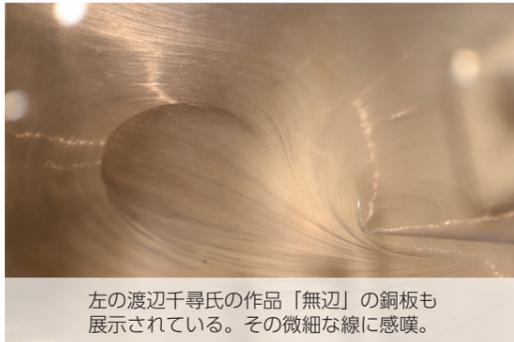
17世紀型ロール式木製版画プレス機の復元（複製）。



前号で取り上げた李谷圭章さん作品も特別展示。窓の外は熊本県天草が見える。



渡辺千尋氏の作品「無辺」。
2007年エンブレービング。



左の渡辺千尋氏の作品「無辺」の銅板も展示されている。その微細な線に感嘆。



The melting lord -After light after time after gravity
2021 エッチング、アルシュ紙 102 × 198cm ed.10

日本の銅版画発祥地の芸術拠点「南島原市アートビレッジ・シラキノ」



入口の門には「白木野小学校」の看板——長崎県南島原市の「アートビレッジ・シラキノ」は、2015年に廃校となった小学校を再利用した芸術拠点だ。掲げるキーワードは「廃校・版画・再生」。旧校舎に、銅版・木版・リトグラフ・シルクスクリーンを扱う工房を整備し、若手作家を招聘するアーティスト・イン・レジデンス（AIR）を毎年実施している。取材時にはイギリスの版画家、ドロレス・デ・サドさんとテキスタイルアーティストの山本遥さんが滞在しており、工房で制作に励んでいる様子を拝見できた。滞在する芸術家は制作と並行して成果展やワークショップを行っている。1階はギャラリー、2階は滞在者用の宿泊室、3階は版画工房とアトリエ。社会教育施設としての公開性を保ちながら、制作・展示・交流を一棟の中で循環させる設計で運営されている。

取材陣を受け入れ、館内をご案内してくれたのは、シラキノの運営を担うエデュケーターの池田俊彦さんだ。銅板に極小の点を刻み、腐食で黒の階調を立ち上げる緻密な表現で知られ、「死を拒絶し永遠に生き老い続けるもの」をテーマにした作品づくりをしている銅版画作家でもある。現在は、このアートビレッジ・シラキノに居住し、工房運営、AIR運営、展示企画、講座設計などを担っている。

入館すると、展示は1枚の銅版画《セビアの聖母》から始まった。これこそが日本における最古の銅版画。16世紀末、南島原のセミナリヨ（イエズス会の教育機関）で、日本人が制作したとされる日本史上初の銅版画だ。シラキノはこの銅版画技術発祥の地・南島原の歴史と文化を継承し、地域と芸術を活性化することを施設ミッションとしている。

池田さんに腐食銅版画（エッチング）の技法を解説してもらった。銅板に薄く均一に塗ったグラウンド（防蝕膜）をニードルで引っかき、塩化第二鉄で腐食させ、水洗と乾燥させた後、インクを詰め、雁皮紙などを重ねてプレス機で刷る——というのが一連の工程だ。

銅板の表面の曇りは背景の汚れにつながるため、研磨剤を使用して磨き上げる。グラウンドは松脂・蜜蝋・アスファルトなどを混合し6時間くらい煮込む。季節で蜜蝋の量を調整。夏は柔らかくなりすぎないように減らし、冬はひび割れを防ぐため増やすという。腐食の止め方は日本では重曹中和が一般的で、ヨーロッパでは希硝酸リンスを使う例が多いとのこと——アートとはいえ、銅版画の制作現場は化学反応と実験に支えられた、職人氣質を要する仕事場なのかもしれない。

最後に池田さんに「銅に対する思い」をうかがった。私の銅に対する思いはかなり強いです。銅版画は中世ヨーロッパから始まり、当時の錬金術と関連する腐食技術から発展しました。腐食しないもの、いわゆる貴金属というのは「金」だけで、西洋世界では金が貴金属とされ、他は卑金属とされていますが……、卑金属とは加工できる素晴らしい金属で、その中でも一番加工に適しているのが銅だと思っています。この「銅」を使わないとできない銅版画の世界があるということ、を、伝えていきたいと思っています。

ちょっと傲慢な言い方になるかもしれませんが、銅の良さ、銅版画の良さを見極めるのは難しいことです。100mを10秒で走るのと9秒90で走る、この違いがわかりにくいように、銅の美しさは、銅に関わり続けないとわかりません。だからこそ、私はこれからも銅に関わり続けていきます。

池田俊彦 Toshihiko Ikeda

1980年、東京都八王子市生まれ。銅版画家。2003年多摩美術大学絵画科油画卒（福沢一郎記念賞）、2005年東京藝術大学大学院版画修了。2013年文化庁在外研修でロンドン滞在。点描と腐食による細密表現で「死を拒絶し永遠に生き老い続けるもの」を主題とする。アートビレッジ・シラキノのエデュケーター。教育普及・AIR運営・展示などを担当。



廃校になった校舎をそのまま利用している。そのため校門には「白木野小学校」の看板がそのままある。

銅板を刻む体験と銅版画実演



エンブレーヴィング（直刻）、メゾチントなどさまざまな銅版画の技法を解説、実際に銅板を刻む体験も。

《セビアの聖母》 復刻版



16世紀末、南島原市・有家セミナリヨで日本人の手により制作された日本最古の銅版画の原像を、銅版画家・渡辺千尋氏（1945〜2009）が資料調査と伝統技法にもとづき復刻したもの。技法は銅板にビュランで線を直接刻むエンブレーヴィング（直刻）で、細線の密度によって光と陰影を組み立てる。本品は作家監修下で刷られた貴重な「本刷り」であり、原像は当時ローマ法王にも献上された記録をもつ。南島原市はこの歴史を「セミナリヨ現代版画展」を開催して継承し、毎年公募をしている。